

説教 『今日の風、今日の聖霊』 山本 護 牧師  
聖書 出エジプト記 16:17~21 / ヨハネによる福音書 3:1~9

建設途上の集会所、風で運ばれた落ち葉が散らばっていた。翌日にはその落ち葉、数カ所に吹き寄せられ、あたかも片づけられたかのように。縦横に吹く風(霊)の行方は分からないが、落ち葉という現実には聖霊の思いを確かめる。イエスは語った。「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである(ヨハネ 3:8)」。

敵対するファリサイ派「ユダヤ人」に属するゆえ、ニコデモは夜こっそりイエスを訪ねて教を乞う(3:1~2)。生真面目なニコデモは己が信仰に渴きを覚えていた。イエスはそれを見抜き「アメン、アメン、お前さんに言うておく。新たに(上から)生まれねば神の国を見ることはできぬ(3:3 直訳)」と応じた。信仰の渴きは「霊的」な枯渇であった(3:6)。四角四面のニコデモは字句通りにしか理解できず(3:4)、イエスは念を押して「アメン、アメン、お前さんに言うぞ」とくり返した(3:5)。

それでは「新たに(上から)生まれる」とは何か。また「霊の渴き」とはどういうことか。「上から」とは神によって生まれ変わる事。そのために人の深みを「思いのままに吹く風(霊)」が吹き抜ける。先週、イエスによって「風穴が開いた」と説教したが、ガチガチの信仰に凝り固まらず、頑なな自分を手放し、「風穴が開いている私」でさえいけば、そこを霊が吹き抜けていく。私たちは、思いのまま吹く風によって、自ずと吹き寄せられる落ち葉。風穴が開いていないと、神の息たる霊が枯渇する。

「だれでも水と霊によって生まれなければ…(3:5)」。「水」とは一度限りの洗礼が予感されるが、それはまた思いのままに吹く霊と密接に結びついている。「新たに(上から)生まれる(3:3)」ことは、十字架と洗礼というただ一度の出来事でありながら、日々新たに感じ、新たに驚き、新たに見いだすこと。

「モーセは彼らに、〔だれもそれを、翌朝まで残しておいてはならない〕と言った(出エジプト 16:19)」。神が与えて下さる日々のパン「マナ」のことだ。マナとは「多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく(16:18)」という分かち合うべき糧(生活必需品)。だがそれ以上に重要なのは「翌朝まで残しておいてはならない(16:19)」今日だけの糧であるということ。魂の糧であるキリストの霊もまた、私たちを吹き抜ける今日、食べねばならぬ。明日の分は確保できないから他者の分まで独占することもない。イソップ物語「蟻とキリギリス」に譬れば、今日直感するキリギリスか。

「アメン、アメン(はっきり言うておく ヨハネ 3:3,5)」と念を押して教えられながら、ニコデモは「どうして、そんなことがありえまじょうか(3:9)」と受け入れられない。だが易々と「分かったつもり」になるよりいいか。不器用な硬派、霊に渴いたニコデモには、今日その「風の音(3:8)」を聞いてもらいたかった。明日になれば、今日の風はもはや風ではない。だからいつでも、今日しかないのだ。

吹き抜ける霊は今日、何を語っているのか。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである(3:16)」。明日になれば腐り(出エジプト 16:20)、「どうして、そんなことがありえまじょうか(ヨハネ 3:9)」となる。だから今日、聞け。



【おまけのひとこと】

風が留まるなら風ではないように 留まった聖霊の働きはありえない 聖霊の行方もまた分からず 私たちはその響きを思い起こす 一貫していない事を恐れるな 自分を模倣する处世術を覚えるな